約束を果たし異なる地で再び廻り出会う　北京遭遇 2013/01/11-26 steps gallery Criticism by MIYATA Tetsuya Vol.36

2011 年 6 月に太田三郎、倉重光則、中津川浩章、永野のり子、吉岡まさみは北京で展覧会を行った。同メンバーによる、日本での新作展覧会となった。太田以外はステップスギャラリーで個展を行っている。個展以上の力を感じるのは、常に制作するアーティストの意気込みだろう。

太田は北京で拾い集めた「拾得物」を切手にした紙にレーザーコピーの作品を 5 点、倉重は《underground》の大型小型を一点ずつ計 2 点、中津川は中型の《心は留まりそして家は動く》シリーズを 6 点と事務所に小品 3 点の計 9 点、永田は中型の《北京叙景》シリーズから 2 点、吉岡は画廊内にテープインスタレーションの《秘密の記憶》を一点、事務所にパネルにアクリルまたはオイルスティックの小品 4 点を展示し、計 24 点の作品が集った。

私は他の媒体やダンスの記事も書いている。ステップスギャラリーの展覧会評を担当しているかは問題ではなく、この展覧会には圧倒された。暗い現代の動向に対して、真直ぐに向き合い、自己の主張を明確にする作品が立ち並ぶ。

太田の作品はミニマルな展開の中に微細な変化の差異を示すものではない。オリジナルなきシュミラークルはそれぞれをオリジナルと化し、それぞれオリジナルはオリジナルを持たずに変容を繰り返す。倉重のペインティングにもまたオリジナルは存在しない。「いま、ここ」を飲み込み、刻々と更新するのは見る者の視線ではなく、倉重の絵画の特徴なのだ。中津川が織り成す「容」は有機的に変貌を遂げる。ここには点・線・面という概念は存在しない。画面に描かれた一つの筆跡が互いに関係することから絵画が誕生していくのだ。永野が描く縦軸と横軸を、見る者が編み込んでいく。永野の視線は何処にあるのかというと、それは絵画の内側に隠されている気がする。外側/内側から、内側/外側は、永久に手が届かないところにある。吉岡のインスタレーションはギャラリーの扉の窓にも派生し、見る者はその無機質な感覚に戸惑う。そこにこそ、概念と実体の交換が隠されているのだ。強力な作品が互いを干渉しない。作品は大きさではない。内容なのだ。

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-4-13 琉映ビル 5F Tel&Fax 03-6628-6195 http://www.stepsgallery.org/